

『道藏輯要』と明清道教國際學術研討會參加記

森 由 利 亞

二〇二一年五月一日と二日の兩日にわたり、新型コロナウイルスが依然として燦る中、香港中文大學黎志添教授の主催によるオンライン會議の形で「『道藏輯要』與明清道教國際學術研討會」が行われた。この會は、清朝の道書集成『道藏輯要』について、故モニカ・エスポジト博士（Monica Espósito、京都大學）、麥谷邦夫教授（京都大學京都大學人文科學研究所・當時）、クリスチャン・ウィッテルン教授（京都大學京都大學人文科學研究所）、及び上記の黎志添教授が中心となつて行つた大規模な國際的研究の成果である『道藏輯要・提要（上・中・下）』（香港・

香港中文大學出版社、二〇二二年）の出版を記念して開催された。該書については、本會會員酒井規史氏より本誌で紹介がなされているので参照されたい。以下では、この研討會に提出されたペーパーに基づいて特に筆者の印象に残つた點を中心に簡単に紹介し報告に代えたい。報告者は全十五名、いずれも『提要』執筆に参加したメンバーである。なお、以下の紹介順序は報告の順序とは異なる。

謝聰輝氏（國立臺灣師範大學）「〈化士〉的意涵・來源及其在明清道教教錄中的職能研究」〈〈化士〉の意味、由

來、および明清道教授錄におけるその職能の研究」。この報告は、謝氏がフィールドワークのなかで収集した授錄關連の文獻に「化士」によって「代香遠叩」する習慣、すなわち明清期に龍虎山から化士が他地域へと派遣され、天師や法官に代わって遠方の龍虎山を叩頭拜香して、祖天師に盟傳香火を求めて授錄を傳度し進職させるという習慣に關する記録を多く發見したことに基づくという。

「化士」の意味、その力の源泉についての當事者側の理解、正一經錄の傳授體系における地位、佛教における類似的職能との關連などを明らかにする新知見滿載の報告であつた。

許蔚氏（復旦大學）「道教的經懺與拜懺——清刊『太極璇璣金章玉斗法懺』（『道教の經懺と拜懺——清刊『太極璇璣金章玉斗法懺』について）。本報告では、道教の懺法は『太上慈悲道場消災九幽懺』を嚆矢とし、それは佛教の『慈悲道場懺法』を模倣していることを前提とすることがまず確認される。その上で、同時にそれは靈寶經の方ごとに天尊を禮拜する形式を懺法と結合させており、

道教懺法の展開の中で靈寶經の儀禮様式は消えることなく繼續している點が新たに指摘される。つまり、靈寶經の儀禮形式、いわばその遺傳子が、佛教の影響が強い道教懺法の歴史のなかで生き残っていったさまを示していると言える。道教の連續性、獨自性が佛教の影響のなかで保たれていることが指摘されていることが興味深い。

胡劼辰氏（湖南大學嶽麓書院）「清末川黔地區科儀文本的交涉——以『重刊道藏輯要續編子目』所收部分道書爲例」（清末の四川・貴州地域間における科儀書テキストの交渉——『重刊道藏輯要續編子目』所收の一部の道書を例に）。この報告でも最初に確認される通り、清末の二仙庵で刊行された『重刊道藏輯要』の目錄である『重刊道藏輯要續編子目』には、一般に廣く流布する『重刊道藏輯要』としては刊行されることのなかった典籍が複数收められている。この報告はその事情を深く掘り下げるとともに、それらの道書のうち『三十六部尊經』、『太上無極大道延壽集福消劫寶懺』、および長らく失われていた『太上洞玄靈寶玉樞調元應顯尊經』が、實は同治七年（一八

六八)における貴州の儒壇ネットワークが刊行した『三清皇經注解』から出ること指摘。その発見に基づいて、四川と貴州との間でこれらの道書のテキストが往復するような形式で傳播していた事情を再構成する。『文帝全書』の研究で知られる報告者による、緻密な文献研究に基づく報告で、細部の具體的な指摘から裨益される點も多かった。

蓋建民氏(四川大學道教與宗教文化研究所)「道教南宗白玉蟾文集流傳中『九大』問題叢考」(「道教南宗白玉蟾の文集の傳播における九つの重要問題について」)。ここでは、白玉蟾の著作について、その流傳の過程で生じたと考えられる、篇の題目に關する問題點や、題名を異にする篇の内容の相互關係、散逸した篇と現存する篇の間の諸關係、特定の篇の史料的价值など、九點の具體的な點が指摘され検討がなされる。とりわけ、「謝張紫陽書」の鸞書としての性格を論じ、その内容と重なる『金丹四百字』の眞の著者が實は白玉蟾であることが指摘される第八點の議論は、近世道教典籍史に關わる重要な議論であ

ろう。

黎志添氏(既述)「考證《太上老君常清靜經》成書於唐代的說法」(「太上老君說常清靜經註」唐代成立說の檢討)。この報告では、『道藏』所收の杜光庭注とされる『太上老君說常清靜經註』が、實際には杜光庭による注ではあり得ないこと等を論じ、さらには『清靜經』が唐代ではなく北宋初に至って出現したものであるという結論へと至る。從來、杜光庭注を前提とする論が多かっただけに學界からの反響が豫想される。

王宗昱氏(北京大學)「評《道藏輯要》對清真館本《雲笈七籤》的校改」(「『道藏輯要』が清真館本『雲笈七籤』に對して行つた校訂を評する」)。本報告では、中嶋隆藏氏、蔣力生氏、李永晟氏の研究を踏まえつつ、『道藏輯要』所收の『雲笈七籤』がいわゆる清真館本を底本とし、道藏本を參照しながらも、どのような校訂がなされたテキストであるのかについて入念な検討が示される。その結果、輯要本の編集方針には一貫した方法が缺如しており、總じて中途半端でかなり問題のあることが指摘されてい

る。

Volker Ollies 歐福克氏 (Humboldt-Universität zu Berlin、四川大學道教與宗教文化研究所)「李實孔師…略論劉止唐、劉氏家族及槐軒門人對四川道教發展的貢獻」(「李は實は孔の師なり——劉止唐・劉氏一族・および槐軒門人の四川道教の發展に對する貢獻について」)。本報告で解説される通り、劉沅(一七六八—一八五六)が四川で創始した劉門は、清末民初の四川において在地社會の教育、學術、慈善、宗教の領域で、儒佛道三教に通じ、特に儒教を基礎としながら道教的修養や儀禮にわたる活動をしている。この報告ではその歴史と活動のあらましが述べられ、特に、青羊宮をはじめとする諸道觀を劉門が積極的に管理・修築するなどしていた事實の指摘を通じて、在家の社會集團が道觀の管理や維持に大きな力を發揮したことを明らかにしている。

劉迅氏 (Rutgers, The State University of New Jersey)「空山聽雨…女冠王清微與晚清江南的詩書團體」(「空山に雨を聽く——女冠王清微と晚清江南の詩書サークル」)。

優婆夷から在家の女冠へと轉じた王清微が、江南において、そのすぐれた繪畫、および書法、詩を通じて時の著名な文人達と交流する人的なネットワークを詳細に描き出す。特に、奚岡の描いた空山聽雨圖をめぐる詩をすす文人と王清微の交流の模様についての指摘は詳細で興味深い。交流する文人の中には陳文述もおり、王清微は陳を含む在家の道教信徒との交流も發展させてゆく。なお、道士のアイデンティティは、正式な通過儀禮を経なくても、周囲との交渉や假託によって形成される側面があるとの報告者による指摘は非常に重要だと感じた。

王崗 Richard G. Wang 氏 (Florida University)「道教法派與明代城市」(「道教の法派と明代の都市」)。この報告では、直沽寨すなわち天津の中心的な廟である天妃宮を中心に、城市の全ての家庭や異なる諸寺廟が参加して行われる迎神賽會の狀況が再構成される。天妃宮においては清微派が傳承されてきたことが實證的に指摘された後、該派が單に廟經營を擔うのみならず、地域の廟のネットワークのなかに組み込まれることで、地域共同體の文化

的な繋ぎ目として機能している状況が浮き彫りになる。

それと同時に、天妃宮の法系は、明王朝との強い紐帯を有しており、地域と王朝との間の關係性を象徴する役割をも擔っていることが示される。明代道教が地域社會において、また帝國的な圖式においてもどれほど重要で活性化の作用を果たしているかを彷彿とさせる報告と言える。

Bony Schachter 羅逸氏（湖南大學嶽麓書院）“Portrait of a Divine King: Zhu Quan's (1378-1448) Apotheosis in Biographical Perspective”（「神格化された王の肖像——傳記的視點から見る朱權の神格化」）。明朝寧王朱權の傳記研究である。朱權が自身を南極遐齡老人の化身として神格化することについては從來の研究でも注目され、ともすれば王朝内における韜晦の姿勢として理解されてきたという。この報告では、朱權が自己の神格としての役割について、金元朝期に異民族が中國を亂したのを最後に老子の變化身が降臨しなくなり、その命を受けて老子の代わりに天上から南極遐齡老人としてつかわれたと主張

している點に注目。それは朱權が韜晦のために自己を神格化していたというよりは、國家にかかわる物語として構想されていた側面があることが指摘される。

賀晏然氏（東南大學）「清初文人趙士春道教生活初探」（清初の文人趙士春の道教生活について）。明末清初、江南常熟の文人趙士春が、幼少期の病氣治療の必要から道教に興味を抱き、同じく道教や養生に興味をもつ文人たちと交流する様子をその詩文集の分析によって掘り起こす。呂毖や王常月といった道士たちとの交流を経つつもやがては文人的な教養と内的な修養への關心を共有する扶乩結社での活動に深く関わってゆくさまが描かれる。文人がその生活と對人交流の場で、修行のありように様々な變化や一貫性を浮かびあがらせる状況をデリケートなタッチで追う論考といえる。

Vincent Goossaert 高萬桑氏（EPHE, PSL）“Shao Zhilin, a Religious Life”（「邵志琳、その宗教生活」）。この報告では、六十四卷本『呂祖全書』と『文帝全書』の刊行で知られる邵志琳を題材に、清朝中～後期の江南士大

夫が扶乩信仰にどのように關わるのか、その生活の描寫を基盤として全方位的に検討している。邵志琳という、決して情報豊富とはいえない文人に關して、その家族や佛教關係の資料を涉獵し、また共に乩書の刊行に關わる人々に關する調査を通じて、彼等の間に廣がる人的ネットワークや、乩書に關わる文人の役割のパタンを抽出して、清朝中期江南士大夫の扶乩活動の類型を驚くべき目配りによつて描き出す。細部から全體の狀況を一氣に立體的に起こして把握する報告者のもつ優れた洞察に壓倒される。

Elena Valussi 瓦琳娜氏 (Loyola University Chicago)
"Reassessing the Publication of the *Chongkan Daozang Jiyao* in Sichuan and Its Relation to Local Historical and Religious Milieu" (四川における『重刊道藏輯要』の刊行と同地域の歴史的宗教的環境との關係を再考する)。この報告では、先ず二十世紀初頭に二仙庵で『重刊道藏輯要』を刊行した三人の編者、閻永和、彭瀚然、賀龍驤のそれぞれについてその傳記的事項を再構成する。特に賀

龍驤の動きが清末民初の四川における政治的な狀況とどのように關連していたかを描き、また重刊の編集過程を詳細に示しつつ検討している。とりわけ示唆に富むのは、閻永和と賀龍驤とは必ずしも同じ立場から重刊の編集に参加しているとはいえず、二仙庵や道觀の改革に取り組む閻永和に對して、賀龍驤は三教合一の立場や文人の扶乩信仰の立場に與しており、ある意味で原刊『道藏輯要』を編纂した蔣予蒲の立場と近いという指摘である。近世・近代の四川道教を入念に研究してきた報告者ならではの説得力ある指摘が隨處に見える。

Jihyun Kim 金吉炫氏 (Seoul National Univ.) "Expansion of Spirit-writing in the Late Chosŏn Korea" (朝鮮後期における扶乩の廣がり)。この報告では、近世中國の扶乩で中心的神格となる呂祖、文昌、關羽が、高麗以降、朝鮮でどのように受容されたかについて見渡し、さらに先行研究をも踏まえつつ、一九世紀の乩壇である無相壇を典型とするいくつかの乩壇の活動の痕跡についての概觀がなされる。それらの乩壇によって『道藏輯要』が受

容されたことが明確に指摘されている。また、當時の貴族が道教儀禮ではなく内丹に大きな興味を示していたこと、彼等が倫理的な秩序回復への關心をもっており、乩書がハングルにも譯されることで民間の倫理的需要にも應えたことなど、極めて興味深く、刺激的な指摘に満ちている。

森由利亞（早稻田大學）「全真教龍門派的自我認知的轉型」（「全真教龍門派におけるアイデンティティの轉換」）。

この報告は、張方氏の研究（張方『明代全真道の衰亡而復興——以華北地區爲中心的考察』北京：中國社會科學出版社、二〇一八年）による、明代全真教における所謂「長春真人仙派」が、派と所傳の法との間に對應關係を持たせていなかったという指摘を出発點とする。報告者は、張氏の指摘とは對照的に、明末伍守陽（一五七四—一六四三）の頃から、複数の龍門派においてはむしろ所傳の法によって派のアイデンティティを表すという形式をそなえるようになったことに注目。それが民間において内丹書を刊行し人氣を博することをも視野に入れた在家士大夫

が展開する道教のありようと關連する可能性を示唆した。以上、雜駁であるが筆者なりの觀點から各報告の論點を羅列した。『道藏輯要』に直接關わるもの、明清期士大夫の宗教にかかわるもの、扶乩にかかわるもの、明清期地域社會の道教に關わるものなど、互いにテーマの響き合う發表ばかりが並び非常に刺激に満ちた有意義な會議であつた。全體を通じて感じられるのは、人々の生活に浸透するものとして見る時、やはり清朝の道教は一際精彩を放つということである。いつの時代にも道教にはそういう側面があるが、明清期の道教については王朝との關係で「衰退」を言うことが決まり文句のようになっている。ところが、生活の細部に浸透する道教を見ると、それがどれだけ社會において無視することのできない力としてはたらいっているのかを實感することになる。なお、どの發表を聴いても、明清道教を研究する學者の層の廣がりとその成長の速さを感じさせる。油斷していると取り残されてしまいそうな焦燥感に焼かれつつ、パソコンの前で冷や汗をかいて坐つた二日間であつた。